

派遣者番号	R 4 K 0 9	氏 名	二之宮 睦
研究主題 —副主題—	中学校特別支援教室専門員との協働に向けた実践研究		
派遣先大学	帝京大学 教職大学院	指導担当者	藤井 靖史
所属	府中市立府中第六中学校	所属長	相馬 朋行

## キーワード：特別支援教室 専門員 協働

要旨： 東京都は、特別支援教室の設置に伴い、独自の職として「特別支援教室専門員（以下、専門員）」を各学校に配置した。そこで、中学校特別支援教室専門員の業務の実態と課題を明らかにするとともに、学級担任や巡回指導教員と専門員とのより良い協働に向けた方策を究明することを目的として本研究を行った。専門員を対象とした調査研究からは、職務が教職員に理解されていないことや、教員への情報伝達の内容や方法などに関する課題が明らかになった。そこで、専門員の職務にアクションリサーチの手法で関わる実践研究を実施した。その結果、専門員との協働に向けては(1)教員が専門員に対する理解を促す取り組み（校内研修会等）(2)授業での生徒の行動観察の観点を明確化すること(3)情報共有のために専門員と教員との日常的なコミュニケーションの場を設定すること(4)教職員の役割・立場の明確化が必要ということが明らかになった。

# 中学校特別支援教室専門員との協働に向けた実践研究

二之宮 睦

帝京大学大学院教職研究科スクールリーダーコース

キーワード：特別支援教室 専門員 協働

## 1. 研究の背景

東京都は、情緒障害等通級指導学級を、拠点校の巡回指導教員が自校と巡回校を巡回して指導する形式に移行し、令和3年度に全公立中学校に特別支援教室の設置を完了した。巡回方式に切り替えたことで、全ての生徒が自校で指導を受けられるようになった。また、東京都独自の職として「特別支援教室専門員(以下、専門員)」および「巡回相談心理士」を各学校に配置している。専門員は、各校に1人配置され、在籍校での巡回指導日の時間割の調整、巡回指導教員が不在の日の児童生徒の情報収集や記録、教材準備等、巡回指導教員等と連携し特別支援教室の円滑な運営に必要な業務を担う会計年度任用の職員であり、教員免許状の保持は推奨されてはいるものの、必ずしも特別支援教育の専門家とは限らない。特別支援教室を利用する生徒が増加しており、巡回指導教員も多忙になる中で、今後、ますます特別支援教育を推進する上で、教員と専門員との協働は重要になると考えられる。

## 2. 研究の目的

中学校特別支援教室専門員の業務の実態と課題を明らかにするとともに、学級担任や巡回指導教員と専門員とのより良い協働に向けた方策を究明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1)調査研究:専門員を対象としたアンケートによる実態を調査し、専門員と教員との連携に重要と思われる観点を抽出する。

(2)実践研究

(2-1)教員を対象とした専門員の業務内容に関する校内研修会を実施し、(2-2)筆者自身も長期間継続的に参与観察者として関わりながら、教員との連携という観点における専門員の意識や行動の変容をアクションリサーチの手法を用いて分析した。専門員が学級担任、巡回指導教員との関わりの中で課題を解決していく過程を観察することで、専門員と教員の協働のための方策が明らかになると考えた。

## 4. 調査研究

(1)目的

専門員の職務の実態や課題意識を明らかにする。

(2)方法

令和4年度、東京都A市内公立中学校全11校に勤務する専門員11名を対象にアンケート調査を実施した。

(3)結果及び考察

専門員11名全員から回答を得た。専門員は業務の大半を生徒の行動観察に充てているが、必ず

しも観察の視点が教員と共有されていない実態が明らかになり、このことが教員との情報共有・連携に関する課題意識につながっていると考えられた。また、本来の業務ではないことを依頼されるなど、業務内容が教員に十分に理解されていないと感じていること、実際の業務内容が学校によって異なること、拠点校と巡回校で課題が異なること、専門員の相談体制が不十分である実態などが明らかにされた。

## 5. 実践研究

### (1) 校内研修会

所属校の教員を対象に専門員の業務に関する10分間程度の研修会を実施した。研修前に専門員の業務内容を完全に理解している教員は約半数であったが、研修会後は、専門員の業務の理解が深まり、専門員からも業務遂行の改善に有効との意見が聞かれた。

### (2) アクションリサーチ

#### 1) 目的

専門員と教員との連携における課題解決の方策を探る。

#### 2) 方法

A市内B中学校(特別支援教室拠点校)で特別支援教室を利用している生徒1名に関わる専門員、巡回指導教員、学級担任、教科担任を参加者として、筆者も参与観察者として加わった。筆者とともに専門員が生徒の授業中の行動観察を行う際の視点を明確化していき、教員に情報伝達を行うことを繰り返した。定期的に、専門員と筆者が行った面談を全て逐語記録化し、専門員の意識や教員との連携に関する実感の変化を分析した。また、筆者と巡回指導教員、学級担任や教科担当教員との面談の逐語記録から、専門員からの情報提供が、生徒指導や専門員との協働に関する意識変化に

どのように影響したかを分析した。

### 3) 結果及び考察

生徒の行動観察に関する視点を専門員が教員と共有することは、教員への情報伝達内容の整理や観察記録の作成時間の短縮にもつながること、また専門員が教員との連携に実感をもてるようになることが明らかにされた。他方で巡回指導教員からは、専門員からの的確な意見が生徒指導に還元できることも示された。しかし、専門員の生徒に関する主観的な情報を教員との間で共有することに関しては課題が残った。さらに、今回の実践を巡回指導教員が学校で実施することで、専門員への理解が高まり、専門員の不安や戸惑いの軽減につながると思われた。

## 6. 研究の成果と課題

教員と特別支援教室専門員との協働のための方策として、(1)教員が専門員に対する理解を促す取組(校内研修会等)(2)専門員と巡回指導教員と一緒に授業を観察し、授業での生徒の行動観察の視点を明確化すること(3)情報共有のために専門員と教員との日常的なコミュニケーションの場を設定すること(4)教職員の役割・立場の明確化を提案する。本研究は所属校がある地域の専門員に限定した研究であり、実践研究の対象も限られている。学校によって専門員の業務内容が統一されていない中での専門員との協働の促進には、各学校の状況に応じたアクションリサーチが有効であると考えられ、今後も研究の蓄積が必要である。

### 主要参考文献

●東京都教育委員会「特別支援教室の運営ガイドライン」2021年3月